

カンボジア国民議会選挙監視レポート

高橋里沙(会員)

2003年7月27日、カンボジア王国の国民議会選挙が全国区で行われた。UNTACが介入してからおよそ10年の後に行われた第三回目の国民議会選挙である。民主主義国家にとって国民の声を直接反映させるための唯一正確な手段としての選挙は、カンボジア国民の間にも意義を見出させているように窺い知れた。98年の選挙の際には直前に暴動が起きた。しかし、今回の選挙では、大きな暴動らしい騒ぎも起きず、日常の一部に選挙という一般行事が盛り込まれているように思われた。

私にとって今回のカンボジアミッションは初仕事であった。国内外を含めた平和構築プロジェクトに大きく携わる初めての機会が与えられたのである。カンボジアについては小型武器問題に関する研究対象国として、多少歴史・文化等は理解しているつもりでいたが、現地語であるクメール語はひとつも知らず、英語も不得手で、さらに社会経験のない私に一体何がどこまでできるのやら、と家族全員に批難されつつの出国だった。反発精神を剥き出しにして、やれることをやるために参加させていただいたミッションだった。

監視員には次の四つの性格1)短期国内監視員、2)短期国際監視員、3)長期国内監視員、4)長期国際監視員があるのだが、私のような2)の短期国際監視員に求められていることはただ一つである。それは、不正や犯罪を未然に防ぐための抑止力的存在となることである。望ましくは、国際監視員などいなくとも、一つの不正もなく行われるべきものが選挙であるが、まだまだカンボジアでは国際監視員の存在に依存している。国内監視員は、選挙後も同じ土地に残り、生活を続けなければならない。それゆえに、時には違反を前にして、強く問いただせないこともあろう。このケースを想定して、短期国際選挙監視員という制度があるように私は思う。次に、長期監視員の仕事は、大きく以下の二点に分けられる。1)選挙が公正に行われるための下地作り。たとえば、選挙絡みの重大犯罪(時に殺人事件にまで及ぶ犯罪や贈収賄等の不正な献金などを重大犯罪とする)を通告する外部者としての存在である。短期監視員には各政党が裏でどんな取引をしているかまでは見えてこないことが多い。しかし、およそ3ヶ月間選挙のために現地に滞在している長期監視員には見えてくる裏事情があるかもしれない。それは噂話のような形で耳に入ってくるものであるかもしれないが、そのような情報であってもないよりは有益である。次に、2)短期監視員がスムーズに監視活動を行うことができるような下地作り。東京に東京の事情があるように、大阪には大阪の慣習がある。カンボジアとて同じことである。郷に入った者が、うまくその文化に溶け込むことのできるように、不要な(必要な争いの有無は別として)争いを生み出さぬように、その地域の事情に少しでも精通した者のいた方が当然仕事はやりやすいものである。雨が強くて通行可能な道路を知っていると、その地域の人間関係に強いとか、そこに暮らしている者にとって当たり前のことを知っていることが一番に求められていることだと私は思う。現地語もままならない短期監視員も一緒になって仕事ができるようにするには、長期監視員の存在は不可欠である。

カンボジアという国は、親切にしてくれる人を大切にすることを私には感じられた。だから、私たち短期監視員も親切心には感謝の意を示す。小さな積み重ねで人々は心を開く。宿泊先の従業員にいつでも微笑むことを忘れなければ、彼らは私たち外国人に対してもほんの少し

心を開いてくれる。「選挙に行くか？(Will you go to the bochenao? (=election in Khmer)」との私の問いに戸惑いを見せながらも、「ただ行くか行かないかだけ答えてくれれば良い。どの政党に投票するのか尋ねているわけではないよ。」と言葉を足すと、「もちろん行くよ。」と笑顔で答える。キーワードだけクメール語で尋ねれば、英語のわからないモトバイ(現地の移動交通手段。オートバイのこと。)のお兄ちゃんであっても会話ができる。投票を済ませた有権者はみな右手の人差し指に黒っぽい油性インクをつけているので、投票したかしていないかは一目瞭然なのだが、顔見知りのモトバイのお兄ちゃんの指が白かったので「あっ、兄ちゃん選挙行ってないね?!」と強く問いかけたところ「選挙は金にならない。俺は仕事をしてたぜ。」と得意げにクメール語で返してきた。ストリートで金稼ぎをしなくてはならない幼い子供は、しきりに私にクメール語で話しかけてくる。値段の交渉は指文字の数字と顔の表情でうまくいく。目のあてられない熾烈な戦いを生き抜いてきた彼らであるはずなのに、猜疑心を持たない人々。これは選挙とは直接関係のない瑣末な事柄なのかもしれないが、こればかりは行ってみないとわからない事柄であるように私は感じた。

プノンペンの中心部より車で5分ほどの場所にあるスラム街。裸で遊ぶ子供たちと、ところ構わず干された洗濯物。その隣には魚や焼き物の乾燥物。赤ん坊が泣く。思春期の男の子たちは一所に小さくまとまって座っている。町並みが少し違うだけで、同じ人間の暮らす場所だった。政党のポスターが無秩序に貼られていた。私たちが事前研修で資料として見せられた、まがい物の投票用紙(一政党以外はメガネや飛行機などの意味のないプリントがナンバリングされた偽の投票用紙。実際に出回ったことがあるらしいが、日本でそのような紙切れは、ままごと遊びでも通用しないのではないかと感じた。)を拡大したものや、政党の名前だけが大きく書かれたものなど、様々な政党アピールのための張り紙である。選挙法では、そのようなポスターや看板は、住民の許可なくして住居に貼り付けられた場合違法扱いなのだが、ある住民は違法と知りながらも面倒なので見てみぬ振りをしていたり、お隣さんが貼っているのに、うちだけ貼らないわけにはいかない、といったような当人にとっては複雑な事情があったりして、違反根絶の日までゆっくりした足並みを保っているように思われた。しかしスラム街の女性の中にも、選挙の意義を真摯に受け止めているグループもあり、そこは様々な人々の暮らす、ある意味では都会のような小さな街のようだった。

あるカンボジアのローカル人権NGOのスタッフは人権NGOスタッフであるにもかかわらず、興味深いコメントを我々に残した。我々の側が、カンボジア人女性の家庭内での意思決定・その尊重についてはまだまだ浸透しないところも大きいのではないかと。たとえば、一家の主の支持する政党に、その家の女性は投票するように主である男性から言われた場合、人権NGOとしてはどう考えるかを尋ねたところ、彼らはそのことをカンボジア文化として当然のことと考えると答えた。つまり、女性が男性の決定に従うことは、選挙とて取るに足りない当たり前のことであると認識されていた。これが人権NGOの回答であった。すべてのカンボジアのローカル人権NGOが同じ認識をしているとは思わないので、これはあくまで一例ではあるが、カンボジア文化を紹介する良い具体例となると思う。カンボジア文化と言っても、ある家庭はその文化を踏襲するだろうし、ある家庭は独自の慣習を築くだろう。そのようにして、日本もかつて、そして今なおそうであるように、民主化の過程をカンボジアも辿っているように思う。

今後のカンボジアのさらなる発展のために、結びとして書きとめておきたい事柄がある。独立から10年を経た現在、カンボジアが自立を遂げるために必要なことは、さらなる内部からの力である。各政党の選挙キャンペーンの最後の日、プノンペンの街はカーニバルのように、三大政党のアピール合戦が行われていた。キャンペーンカーの荷台は選挙権を持たない小学生や中学生の少年少女たちがおよそ3分の1を占め、(トラックの荷台に乗れる限りの人数を乗せて政党アピールのテーマソ

グのようなものを気分次第で歌っているように見えた。)投票所のスタッフも若者が多かった。10歳になろうとしている小学生のような国を支えていくのは、同じように年齢を積み重ねていく少年少女たちと、その家族であってほしいと私は思う。そして、その暁に我々の仕事のなくなる日が来るならば、それを証拠に私たちは「カンボジアは民主主義の国として、自立したすばらしい国である。」と言うことができるであろう。

補足)各政党と国民の温度差について(中間開票結果報告に関して)

今回の選挙の中間開票結果の後に、各政党と国民の間に明らかな温度差があるように感じられた。我々インターバンドは、カンボジア駐在の日本人の方に手伝っていただいて、カンボジアのローカル新聞の翻訳されたものを、選挙関連の記事に限って出国前・帰国後と読むことができた。集められた様々な記事によると、現在各政党は議会での議席獲得のために野心を燃やしており、選挙前の公約とは関係なしに、野党と与党が連立を組もうとしているなど、各政党が迷走しているかのように報道されている。この事態に関して国民は、選挙前に望んでいた形とは違うと感じ、国王は、『国王としては中立性を保つ(いずれの政党に対しても特別な支持表明はしないなど)』との見解を発表する一方で、一国民としての見解も発表しているようで、国全体の基盤が揺らぎつつあるように私は思う。